



半井卜養狂歌集  
其他

特別  
〜9  
1593





利  
卷  
1.5.93



1593

半井上養相奇集

是入梅松と入る事と

法坊と本庄は松うはらうて

これの命とりはうて

鞍の角は山菜花入はた

山菜花とちと鞍の角はて

花のうやもちなちあん

船のと扱理してはの

これらにらるも何文

此一冊にのりてはて

此の事とてはて

此の事とてはて

此の事とてはて



よきむらさきのちりめん  
檜栴 あんす 白大黒  
三つよしのいよこし  
はるよ

果てつらんよんたはははの  
二つよしのいよこし  
石竹 一八 水百合 蘭

菊 女 心 花 白 心 花  
はるよ

いらふよまのいよこし  
よけいよまのいよこし  
名月あちのいよこし  
はるよ

ういよまのいよこし  
よまのいよこし  
やに 舞 花 一 一 一  
はるよ

やに 舞 花 一 一 一  
はるよ

又よまのいよこし  
はるよ  
唐物屋 獅子乃者  
はるよ

はるよ







おのりやうしんはくしん

十の者の目

うらやまのしんがくはくしん

灌解 かくしん

くわんげ

おのりやうしんはくしん

こまのしんがくはくしん

二の目

二のしんがくはくしん

うらやまのしんがくはくしん

十の目

くわんげ

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

くわんげ

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

くわんげ

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん

おのりやうしんはくしん



Handwritten text at the top of the right page.

Handwritten text on the right page, starting with a wavy line.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.

Handwritten text on the left page.



十又も珠物別れは

おのり日中申すのいりおす

おのりおすおすおすおす

お井信濃おすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす

おすおすおすおすおす











漢州の洞庭はなほ  
黄山谷のいり

唐の楚のうら所が  
のりしは

家網公卿抱疾あまはし  
ゆは湯のうら

天下泰平をなほし  
あまは

尺のよまをく  
柿の下のうら

かのみが  
あまは

つゝかか  
あまは

あまは  
あまは

あまは  
あまは

あまは  
あまは

あまは  
あまは

あまは  
あまは

あまは  
あまは







































Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page. A red mark is visible at the top of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.



















Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, with some lines starting with a red mark (possibly a paragraph marker or a specific symbol). The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, with some lines starting with a red mark (possibly a paragraph marker or a specific symbol). The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.











付墨五拾四 内長六寸  
秋のころに...  
身よ...  
秋のころに...  
み...  
秋のころに...  
身よ...  
秋のころに...  
み...

横...  
織機...  
秋のころに...  
身よ...  
秋のころに...  
み...  
秋のころに...  
身よ...  
秋のころに...  
み...







二  
油の香もたはぬの所いよ  
きり目よしむてあふる若旅  
志あるの所さきとむる文殊  
三  
けりあり有

旅籠屋のちも俗も集かて  
見よんといふはかちを  
花のかよもたすくはけ  
よるもいすじも山乃眉  
花らむいしてはくも天  
小まらよちちりのついで  
深島と二一の名をよめゆえ  
楊のいもいもいもいも  
たえよ泉も水打あし  
るいもいもいもいもいも  
文をえあもいもいもいも  
おむらもいもいもいもいも







行方不ばはひの言  
るにふしむる言  
も(あ)るにふしむる言  
まゝにふしむる言  
度呂からふしむる言  
陽本のいふ言  
下るにふしむる言  
あふしむる言

物農のふしむる言  
親とふしむる言  
重城のふしむる言

たふしむる言  
海ものふしむる言  
あふしむる言  
え梅のふしむる言  
幸よふしむる言  
其載のふしむる言  
あふしむる言  
山は梅のふしむる言  
あふしむる言  
花あふしむる言  
日(あ)る言  
あふしむる言















空はけしう輝のるるれ吟  
新門乃輝のるるれ吟何  
うにまのうにち骨のるるれ吟  
去風のちのるるれ吟何  
るるるるるるるるるる  
るるるるるるるるるる  
きたるるるるるるるる  
中さの二層一萬のるるれ吟  
濃茶のるるるるるるる  
るるるるるるるるるる  
まのるるるるるるるる  
接美のるるるるるるる  
うたのるるるるるるる

律  
花和十一 宗塚十三 立倫十三  
徳元十一 吾れ十一 未得十  
城作五 玄何十 文誰自十二  
規も一

獨吟

未得

おの蝶のまをわがわ  
のよしたるるるるる  
音のるるるるるるる  
えのるるるるるるる  
おのるるるるるるる  
るるるるるるるるる  
あはるるるるるるる















































Handwritten text in Arabic script on the left page, featuring a prominent red initial letter at the start of the second line.

Handwritten text in Arabic script on the right page, featuring a prominent red initial letter at the start of the second line.



Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. A red mark is visible at the top of the page.

花をば ばあや  
西公居士

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style.







知拙をわすしの後世の文章

たのむにの群の山の山す山に

の法して見せしる花はり竟

かこらうまてしる物象後

可美の日はたはなりし夢を回さる不

情をたぢりしきし川の冥信

情はゆるしきしけり者の秋

いしきし今し月とこしとみ家

後を後し回しきし指かりわて

まはしきしあましき鳥のまのま

なすけしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

三

次乃や小袖のすまうかたうた

議をあるよとふらひのくく重

しきしあましき鳥のまのま

又教へる今うらまの鳥下

引置のくしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま

のこしきしあましき鳥のまのま











信章 点七寸 四七五  
教泉 点七寸

吉重 点八寸  
盛信 点六寸

家後 点六寸 四九五  
不卜 点六寸 四九五

正貞 点六寸  
筆 点三寸

崇信 点六寸

利見 点五寸 四七五

秀少入 点五寸

政家 点五寸 丸

○運ふもらふて昔よもあらしむ河由河 四七五  
堀を入しめせし丸 四七五

各立の族は浦邊を守りて守 四七五

舟渡漕がのク一といはしま 四七五

○若狭のの舟の舟の舟の舟 四七五

舟の舟の舟の舟の舟 四七五

○秋あしは舟の舟の舟の舟 四七五

今ならぶのの舟の舟の舟 四七五

舟の舟の舟の舟の舟 四七五

又またのの舟の舟の舟の舟 四七五

舟の舟の舟の舟の舟 四七五

舟の舟の舟の舟の舟 四七五

○舟の舟の舟の舟の舟 四七五

舟の舟の舟の舟の舟 四七五











常盤のしるしをのたまふ

ウ公をたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき

あはれなるをたのむるありき



















遠東の事につらあひしに  
しるすはむの事なるに  
つらあひしに様の小袖を  
見しつらあひしに  
川らのおの事なるに  
海のものなるに  
名不詳なるに  
概すものなるに  
地なるに  
しるすはむの事なるに  
父なるに  
かの事なるに

存す持するに  
しるすはむの事なるに  
判と通して  
穴なるに  
目なるに  
在りしなるに  
るものなるに  
田村なるに  
大なるに  
引なるに  
名なるに  
事なるに















あつちのいふいふうさばん上  
ひびく金おとてんびん告  
まのこや入たる砂とゆうよ  
ここの海ちくも碇を踏ち云  
引城の口して帰く燈本之告  
言とまうよもある男山和  
三 香具よさうんおのおいあひ日  
あつちのみとてんの花  
おのづかみゆてんく浪けし告  
いさ夫のたより落る精を  
おのづかみゆてんく浪けし告  
おのづかみゆてんく浪けし告

あつちのいふいふうさばん上  
ひびく金おとてんびん告  
まのこや入たる砂とゆうよ  
ここの海ちくも碇を踏ち云  
引城の口して帰く燈本之告  
言とまうよもある男山和  
三 香具よさうんおのおいあひ日  
あつちのみとてんの花  
おのづかみゆてんく浪けし告  
いさ夫のたより落る精を  
おのづかみゆてんく浪けし告  
おのづかみゆてんく浪けし告



紀念もくもく首よりけり云  
寂のちうりあふさすいあを  
幼少とあもるやんそくこ入  
么ちもくもくふくもく  
別ちてもくしあき大力のつち  
居るもくもくもくと抄理を  
一いつともいあつたもくもく  
残るもくもくもくもくもく  
自由もくもくもくもくもく  
美季も秋の物もくもくもく  
夕雨消し中もくもくもくもく  
新第の宿よ天のおつし云

作りまほと幾をけけあ工  
かちらすもくもくもくもく  
とあいつもくもくもくもく  
又もんの文もくもくもくもく  
今ぬるゆ葉もくもくもくもく  
幾もくもくもくもくもくもく

付墨字六拾九句 未得判  
けり長四

於六句ツ  
正勝 点拾八句長三  
笑言 点拾三句  
酒名 点四句  
推入 点七句  
四句  
点







神宗は頼朝の御子

まの御子に御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子

御子の御子の御子



月がよき海にまの白の河  
三  
美もふらふ道宗を城に流れ  
引してそ代の信のしづみ  
焼青とついで山をのほそひ出志  
三日よき寺家のねしげ和  
かろはあし舟よのあそびく  
おもしろいこもろむらるる  
海海よのしづみとて  
果つともこのまこと何ぞ

昔のよき寺家のねしげ和  
あつともこのまこと何ぞ  
果つともこのまこと何ぞ

夕  
とろくく海にまの白の河  
死骸よの六人塚やほつらん  
あつともこのまこと何ぞ  
浩月と破れ加茂屋とて寺  
たうともこのまこと何ぞ  
おののよき貝とて地も忍歩  
終のまこと何ぞ











たけしむもくしらの道版  
いたして持ふもの三么  
おらるもくしらの道版  
神もつのもじりて捨る文  
美の平の更のあはさるる  
傳どもしや稽よ向ふはるる  
そとくしむもくしらの道版  
あはさるもくしらの道版  
月乃のちしむもくしらの道版  
美の平の更のあはさるる  
傳どもしや稽よ向ふはるる  
そとくしむもくしらの道版  
あはさるもくしらの道版  
月乃のちしむもくしらの道版

志 玄 志 志 玄 志

例のあはさるるもくしらの道版  
美の平の更のあはさるる  
傳どもしや稽よ向ふはるる  
そとくしむもくしらの道版  
あはさるもくしらの道版  
月乃のちしむもくしらの道版

日 月 和 玄 志 玄 志



じの例とみれキカり  
ぬのよみ未の刻よりわかし  
よふにひんていふあそしあん

六 州後ゆる思ふ年思いと昔

園園基基ののけつけつののううねねはは  
川川ののううねねははああそそししああんん

こころそあひよ一期そあひん  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん

あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん

志

結

云

志

くれいの月よあひのたあれ  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん

云 志 和 日

三 ちりて二葉の洞と日と水

くせいの世未のふひのんあひ  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん  
あひんよあひの化八去あひん

表 結



































そよよよよよよよよよよよ  
あよよよよよよよよよよよ  
ねねねねねねねねねねね  
清涼清涼清涼清涼清涼清涼  
代くくくくくくくくくくく  
食食食食食食食食食食食  
ままままままままままま  
いはいはいはいはいはいはい  
ちちちちちちちちちちち  
ふふふふふふふふふふふ  
さささささささささささ

あーのままままままままま  
ねねねねねねねねねねね  
いけいけいけいけいけいけい  
灯笼の火の火の火の火の火  
花の花の花の花の花の花の花  
りりりりりりりりりりり











だづのまようふまき川

糖と 母のえ日

玄札

は合と牛と記せんこゆる  
念瓶とつむまの小車一  
のまらもと綿の機も糸で  
もららの枝ももや瓶の  
おくして掃除もせぬの  
月のおほよ換一と一  
て凡よまらや次たる糸揚  
り合と注いそく本旁はり  
大原やなせたららは報打

佛事の注のすいま士  
とりもあるいまらしや果  
も高のまたく揚るやり  
らのままららななのを  
例の量は念佛のおま  
りのたらにいまらし強根  
とかくしのまの切は何  
り車よまの安をいまら  
るまらららららららら  
ららのおのまらららら  
佛とらららららららら  
花とらららららららら















































とびかゝる人ぞも哀れ  
ねんよるるの習ひて  
たしよるるの習ひて  
奥列の人のよるる  
字女つよよるる  
久方のあまの帯の習ひ  
日つらよるる  
海の海らるる  
しらよるる  
白の白も  
たつよるる  
るのるる

いひつたよるる  
言るもあまの習ひ  
伊は川もあまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ  
あまの習ひ







鳥の鳴かば伊豆は遠き  
かゝる鳥一人の心しれいら  
日裡よ今と雀くさるる  
あまのこしほふまの心を  
藤原よいものちりやあは  
あしやあまの心をたらし  
あまの心もあまの心

賦何表

伊勢屋新光る  
昌詠

うへに増やゆの心をあす東の方  
旅立ちよの心をあすの心を  
いすゝる旅の心の心を  
後

鳥の鳴かば伊豆の遠き  
月をいふあつ物の心を  
思ふよゆたなきの心を  
ふかき心もあまの心を  
あまの心をあまの心を  
大敵の心をあまの心を  
しらの心をあまの心を  
歌の心をあまの心を  
あまの心をあまの心を  
あまの心をあまの心を  
あまの心をあまの心を



又そのまゝはくさるる坂ま  
むくもつ先大蛇とてこゝろ  
昆沙つきの破風のあつた  
合流よるまゝに流る福ひ  
梅の本流よるまゝに折る  
流れはよるまゝに流る  
こゝろもつこゝろのまゝ  
まゝにちりもくまゝにちり  
まゝにちりもくまゝにちり  
七ツのまゝに流るまゝに  
天と流るまゝに流る  
大ぬよ物のなまゝに流る

あつては何とせし秋のいか  
こゝろに流るまゝに流る  
玄冥傳於まゝに流る  
折るまゝに流るまゝに流る  
やいぬまのまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る  
こゝろに流るまゝに流る











鹿溪のふやきりらん  
 一やと二幅のまの月桂  
 さそれり字とらん散葉  
 黄葉とすうのゝあのを  
 りとあけとま川が衣  
 定まてしうちとれ物  
 便和とまのうせの香  
 さいよあははのちれい  
 つもるすいといに  
 音ものこりるもむん  
 ちりり久しこの家  
 昌派丈七 未済丈八  
 俊 派 俊 札 札 派 札 札 俊 派

去れ丈八 景俊丈三

刀銘辨流

元貞のつへと松の木さ  
 さくらんくく花のす  
 派ちり廣能の系  
 金のこの派い  
 つかりてあまの  
 さいの道とあ  
 月山の峯の  
 流の  
 くらくつ























金持ちの御座り候へば  
いふはしむるものなつか  
小波の御座り候へば  
お所の御座り候へば  
治世の天下太平すえは  
あまよあはれ御座り候  
牡丹花もよもや御座り  
いふはしむるものなつか  
あまよあはれ御座り候  
お所の御座り候へば  
治世の天下太平すえは  
あまよあはれ御座り候

いふはしむるものなつか  
あまよあはれ御座り候  
お所の御座り候へば  
治世の天下太平すえは  
あまよあはれ御座り候  
いふはしむるものなつか  
あまよあはれ御座り候  
お所の御座り候へば  
治世の天下太平すえは  
あまよあはれ御座り候







かゝるにあらざるにあらざるに  
なむなれ共にかゝるにあらざるに  
流るるにあらざるにあらざるに  
ふらふにあらざるにあらざるに  
大なるにあらざるにあらざるに  
ふらふにあらざるにあらざるに  
ふらふにあらざるにあらざるに  
ふらふにあらざるにあらざるに  
ふらふにあらざるにあらざるに  
ふらふにあらざるにあらざるに

あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに  
あつたにあらざるにあらざるに

黒雲付七拾七 日七







